

馥郁たるみそひと文字の世界

—王朝和歌の「かをる」「にほふ」を中心に—

北沢 真優

一 はじめに

筆者は高校の古典の授業を通して、古典そのものももちろん、その背景にある文化というものに興味を持った。なかでも河添房江氏の著書¹を通して、現代とは異なる「香」という文化を知り、中世の人々がどのような感覚で「かをり」や「にほひ」というものを捉えていたのかという疑問を持った。

本研究はその疑問を、和歌表現を通して考察したものである。八代集の和歌の中において「かをり」や「にほひ」が詠まれている用例は決して多くないが、その中で、これらの表現がどのように捉えられ変化していったのか。その変遷を辿ることで、和歌表現における嗅覚表現の変遷を辿り、特質の一端を明らかにすることが本稿

の目的である。

二 薰り立つ「桜」——「か」から「かをる」「にほふ」へ——

八代集において「かをる」「かをり」「香」「にほふ」「にほひ」といった嗅覚表現が使用されている和歌を抽出した結果、嗅覚表現を使用した和歌は二〇九首あり、その中で嗅覚表現を用い詠まれている景物は「梅」が最も多く八二首、続いて「桜」が五〇首、「橘（花橘）」が一八首詠まれている。なかでも視覚による賞美の対象であった「桜」は、『金葉和歌集』を境に、それまで嗅覚表現を用いて詠まれる「梅」と歌数において肩を並べる傾向が認められる。

『和歌植物表現事典』において「桜」は、以下のよう
に整理されている。

「桜」は古代日本人にとってその美しさ以上に呪術的意味・機能が関心の対象であった。その開花は秋の豊穡を占うものとして捉えられていた。また、「花」といえば桜」となるのは平安朝以降である。²

このような傾向が八代集、なかでも前半の勅撰集には顕

著に表れていると言うことができる。『古今和歌集』において「桜」が抽出対象の表現（「か」「かをる」「にほふ」）とともに詠まれている例は次の二首にとどまる。

桜の下にて、年の老いぬる事を嘆きて、よめる

色も香も おなじ昔に さくらめど 年ふる人ぞ
あらたまりける (春上・五七・紀友則)

ことならば 君止るべく にほはなむ かへすは花
の 憂きにやはあらぬ (離別歌・三九五・幽仙法師)

対象の表現が嗅覚表現として使用されているのは、前者のみである。これについて片岡智子氏は、次のように述べている。

『古今集』においては視覚表現と嗅覚表現の混同を避けるため、先述の色と香りの歌のように必ず「香」なのか「色」なのかが表示されることになっている。それがなされない場合には、前後の文脈によって判断されるか、それとも万葉語である「にほふ」本来の語義だと見做すことができる。³

殊に「桜」は古代より「桜狩り」など、その美しさを視覚により賞美する景物であった⁴。そのため「桜」においては、後者のように視覚的意味をその語源に持つ「にほふ」を用いて視覚的な美しさを表現し、前者では「香」を用いて淡い香りであることを明示的に表現するという区分が平安時代においては、ある程度なされていたと推察される。

このように『古今和歌集』において、嗅覚表現が使い分けられていた「桜」であるが、のちの勅撰和歌集になるにつれて詠まれる歌数が増えることで、その嗅覚表現が多様化していくことになる。

たづねつる 花のあたりに なりにけり にほふに
しるし 春のやま風

花の香に 衣は深く なりにけり 木の下陰の 風
のまにまに (千載・春歌上・四六・崇徳院御製)
千五百番歌合に (新古今・春歌下・一一一・紀貫之)

風通ふ 寝覚めの袖の 花の香に かをる枕の 春
の夜の夢

(新古今・春歌下・一一二・皇太后宮太夫俊成女)

これらの和歌の表現（「香」「かをる」「にほふ」）は全て嗅覚表現として使用されているが、『古今和歌集』とは異なり、『千載和歌集』では「にほふ」、『新古今和歌集』の紀貫之の例歌では「香」、俊成女歌では「かをる」という語が使用されている。これらの例歌からすれば、「桜」を詠む歌数が増えるにつれて「桜」の構成要素であった嗅覚要素を表現することに意識が顕在化し、嗅覚による桜の表現方法が多様化したと推察される。

これらの結果からすれば、元來視覚的な美しさを表現する「にほふ」に対して嗅覚的な意味が付与されて来るのは、『古今和歌集』以降において顕著であり、一般化していくと見通すことができるだろう。

さらに、嗅覚表現を用いた「桜」を詠む歌には、その淡い香りであることを表現する傾向を示しているのみならず、「霞」や物理的な「距離」により視覚が制限されている例歌や、見立てによる「雪」「雲」などにより制限されている歌がある。

京極前太政大臣家に歌合し侍りけるによめる

くれなゐの 薄花ざくら にほはずは みな白雲と

みてや過ぎまし（詞花・春・一八・康資王母）

ここでは「桜」がおわなければ白い雲だと思つて通り過ぎてしまっただろう、と「桜」を「雲」に見立てる技法を用いている。植物は動物と違い「鳴き声（音）」という要素がない。そのため、視覚の次に嗅覚要素がその景物の重要な構成要素になる。視覚的に美しさを持つ「桜」をあえて見立てや紛れにより隠すことで、「香りまでも良い」というようにその景物が持つ美しさを、視覚だけではなく嗅覚の要素においても表現することにより、一層強調して対象景物の美しさを表現し、技巧的な作品に仕上げる事ができる。そのために見立てや紛れが用いられている歌のなかで、嗅覚表現が使用されていたと考えることができる。

このように「桜」を詠む作品を通して嗅覚表現を見ていくと、『古今和歌集』や『後撰和歌集』においては「香」という語で表現されており、「桜」が詠まれる数が増えるとともに「かをる」や「にほふ」などが嗅覚表現に取り込まれて表現の多様化が図られているということになる。さらに、景物が持つ美しさを強調するため、景物を視覚で捉えることができない情景の設定を意図的におこなない、嗅覚表現による対象の取り立てがなされているのである。

三 混在と多様性の「梅」

「梅」は和歌植物の中で最も多く嗅覚表現を用いて詠まれている和歌植物である。『和歌植物表現辞典』では、次のように説明されている。

「梅」という植物は八世紀頃に中国から渡来したとされている。和歌においても制作年代が明らかな歌はすべて平城遷都以後のものとされている。したがって「梅」という植物はすこぶるハイカラで異国情緒あふれるものであった。古今集以降は視覚による色よりも、梅花の持つ「香」を強調する作の方が著しく増加してくる。それは他の花々を庄する梅花の強烈な香りに対する人々の実感がそのまま文学作品の世界まで浸透したということを表している。ことに暗闇の中で花の姿を見せずに香るという趣向は以降の人々の心を深くとらえた。

また、その香りは人の薫きしめた薫香に重ねられ、花から袖への移り香が好んでうたわれるようになってきた。平安初期には歌材としての紅梅が加わり、梅をよむ歌の内容に一大変化がもたらされる。源氏物語より香りの点では紅梅は白梅に劣るといのが当時の常識であったが、種としての新鮮さだけでなく、

紅涙の比喩としてもうってつけの素材とされ、紅梅の方が恋歌に多用されている。中期には「梅の香」が昔を思いださせるよすがとなっていた。⁵

このような特徴を持つ「梅」を、八代集を対象としてみていくと、嗅覚表現を詠む「梅」は八二首あり、そのうち七三首、つまり八九パーセントが嗅覚表現を用い詠まれている。

折りつれば 袖こそほへ 梅の花 ありとやここに うぐひすのなく

(古今・春上・三二・よみ人しらず)
色よりも 香こそあはれと 思ほゆれ 誰が袖ふれし 宿の梅ども (古今・春上・三三・よみ人しらず)

この二首は『古今和歌集』において、「にほへ」「香」が嗅覚表現として用いられており、いずれも「梅」を詠む。これは先に述べた「桜」との違いであると言えるだろう。これらのことから、視覚で愛でることが主であった「桜」に対し、『和歌植物表現辞典』が指摘するように「梅」は嗅覚を通して愛でることが一般的であった。嗅覚を通して表現することが主であったために、「桜」のように「に

ほふ」の意味を区別しなくとも嗅覚を表現していることが前提となっており、「香」と「ほふ」とを使い分けする必要が生じなかつたのであろう。

「梅」において明確に使い分けがなされていないが、「にほふ」であるが、その意味を嗅覚表現として理解することができるとして、「梅」の香りを表現する他に、「色」と「香」を同時に詠む場合に使用される例と、景物を擬人化している場合において使用されている例とがある。

紅梅の花を見て

紅に 色をば変へて 梅の花 香ぞことごとくに

ほはざりける (後撰・春上・四四・凡河内躬恒)

村上御時、御前の紅梅を女蔵人どもによませさせたまひけるに

梅の花 香はことごとくに にほはねど うすくこく

こそ 色は咲きけれ(後拾遺・春上・五四・清原元輔)

いずれも「にほふ」を用い、「色」と「香」とを対比的に詠み込んでいる例である。「にほふ」は『古語大辞典』を参照すると、次のように六分類がなされている。

- ① 赤く色づく。美しく色づく。
- ② 美しい色に輝く。照り輝く。照る。
- ③ 輝くように美しい。若々しい魅力を発散している。
- ④ (赤土や花などの)色が他に照り映える。
- ⑤ 恩恵を受けて栄える。
- ⑥ よい匂いがする。香気が漂う。

嗅覚表現(⑥)よりも視覚表現(①～⑤)が語義として先行していたと言える。このように、視覚的な美しさを表現する意味が先行していた語であることからすれば、嗅覚表現として使用される場合においても聞き手に視覚的な美しさを想起させることが可能であったと考えられる。そのため、「香」(嗅覚)の美しさを表現しながらも「色」(視覚)の美しさを同時に詠むことが可能となったのだろう。このように「色」と「香」とが「にほふ」によって多角的に表現されることで、一首の中で表現されていると推察される。

四 技巧を駆使する「梅」

流され侍りける時、家の梅の花を見侍りて
東風吹かば にほひをこせよ 梅の花 主なしとて

春を忘るな (拾遺・雑春・一〇〇六・贈太政大臣)

山里の梅花をよみ侍りける

梅の花 垣根ににほふ 山里は ゆきかふ人の 心をぞみる (後拾遺・春上・五八・賀茂成助)

この二首は「梅の花」を擬人化し「にほふ」を用いてその香りを詠む例歌である。前者においては「梅花」に対し「にほひをこせ」「春を忘るな」と主人にその香りを届けることを命令しており、後者においては「梅の花」が「ゆきかふ人の心」を見るといふように、いずれも擬人化された「梅の花」を詠んでいる。

植物自体が擬人化される例は、「橘」や「桜」でも見ることができ、このように「にほふ」を使用して景物が擬人化されている例は、他の植物では指摘できない。「梅」や「桜」、「橘」といった植物が庭木として広く平安族の邸の庭に植えられていたことからすれば、これらの植物が邸の主人(あるいは庭の主人)として擬人化される要素を内包していたと推察できる。その中で「梅」が「にほふ」を用いて擬人化されている理由として「梅」と日常的に使用されていた「香(こう)」との関連も指摘できるのではないだろうか。平安時代に使用されていた香に「梅花香」が存在していた。その香りが「梅」の香

りと強い結びつきがあったことはその名前からも容易に推察される。つまり、その香りによって「梅」自体を「梅花香」を使用していた人に見立てることが可能であったのだろう。その香によつて人を想起するという要素を「梅」が持っていたということも、嗅覚的意味の「にほふ」が使われ擬人化された例歌が詠まれた理由の一つであると考えることができる。

「梅」といふ景物を通して嗅覚表現を見ていくと、「桜」と比較して嗅覚表現は景物の特徴により使われ方が異なっている。さらに「にほふ」には「色」と「香」とを同時に詠む場合と、「梅」を擬人化する場合があり、単純に嗅覚を表現するだけでなく、その表現の特徴を最大限に引き出して和歌表現を豊かにするためにも効果的であったと言えらるだろう。

五 おわりに

本研究において八代集の和歌表現をもとに平安時代の人々の嗅覚表現について分析、考察してきた。

八代集において平安時代の人々はおもに「梅」「桜」「橘」といった植物の「かをり」や「にほひ」をとおして、見立てや紛れのような技巧を用いて、その芳香を賞美した

り、その香りに昔の思い出を重ねていたと考えられる。さらに、対象となつてゐる景物等によつて嗅覚表現を使い分けていたと考えることも十分に可能である。彼らは決して多くの「かをり」や「にほひ」を和歌に詠むことはしなかつた。しかし確実に時の流れと共に嗅覚表現を豊かに、使い分けながら、そして変化させながら、和歌における嗅覚表現の拡大を進めたのだろう。嗅覚という感覚を通して自然の景物の中に自分の感情を詠んでいたのである。こういった感性は現代の私たちにはみることができないものであると言ふことができるだろう。

その後、嗅覚表現は人々の間でどのような感覚として捉えられるようになっていったのか。この点は今後の課題となる。それは八代集に続く十三代集を同じようにみていくことによつて、ある程度の傾向を把握することが可能であると考えられる。また、人間が持つ他の感覚である視覚や聴覚、触覚、さらには味覚というものが詠まれている和歌と比較していくことでさらに嗅覚によつて対象をどのように捉えていたのか、さらなる分析が可能になるだろう。

【参考文献】

片岡智子「歌ことば「藤袴」の香りと色の系譜―平安初期から」古

今和歌集』へ―（『ノートルダム清心女子大学紀要』第二十九巻第一号（日本語・日本文学編）、二〇〇五年）

片桐洋一校注『後撰和歌集』（岩波書店、一九九〇年）

片野達郎、松野陽一校注『千載和歌集』（岩波書店、一九九三年）

河添房江「光源氏が愛した王朝ブランド品」

（角川学芸出版、二〇〇八年）

川村晃生、柏木由夫、工藤重矩校注『金葉和歌集 詞花和歌集』

（岩波書店、一九八九年）

久保田淳、平田喜信校注『後拾遺和歌集』（岩波書店、一九九四年）

久保田淳監修『八代集総索引』（岩波書店、一九九五年）

小島憲之、新井栄蔵校注『古今和歌集』（岩波書店、一九八九年）

小町屋照彦校注『拾遺和歌集』（岩波書店、一九九〇年）

田中裕、赤瀬信吾校注『新古今和歌集』（岩波書店、一九九二年）

田中幹子「春の夜の香り」について―『古今和歌集』躬恒歌を中心に―（『中古文学』第五十七号、一九九六年）

長沼英二「嗅覚表現と恋部和歌―選定方針の変化と『源氏物語』の

影響―」（『表現研究』第八十号、二〇〇四年）

平田喜信、身崎壽『和歌植物表現辞典』（東京堂出版、一九九四年）

平田喜信、身崎壽『和歌植物表現辞典』（東京堂出版、一九九四年）

1 河添房江「光源氏が愛した王朝ブランド品」（角川学芸出版、二〇〇八年）

2 〇〇八年）

2 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』（東京堂出版、一九九四年）参照。

³ 片岡智子「歌ことば「藤袴」の香りと色の系譜―平安初期から『古今和歌集』へ―」(ノートルダム清心女子大学紀要)第二十九巻第一号(日本語・日本文学編)二〇〇五年)参照。

⁴ 注1参照。

⁵ 注1参照。

⁶ 中田祝夫監修『古語大辞典』(小学館、一九八三年)の「にほひ」
「にほひ」参照。

(きたざわ まゆ 鮮鶴UP大学院大学 韓国語教育院)